

# まんだら通信

第236号 (通巻271号)

平成28年02月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## ブツダの教えと お坊さんの宅配便

ヒマラヤ山脈の南の麓シヤカ国に、待ちに待った王子がお生まれになりました。二千五百年前のことです。当時の習わしに従って仙人が呼ばれ、この子の将来を占いました。「このお子は、出家すれば沢山の人を救うお方になるが、年老いた私の寿命ではそれを聞くことが出来ない。」と、さめざめと泣いたという話が残っています。

殊の外、感受性が強いこの王子は、仙人の予言通りに出家してあらゆる苦行の末、その道を捨て、村の娘スジャータが供養した乳粥で健康を取り戻し、ブツダガヤのピツパラ樹の下で悟りを開かれま

す。それ以来、この木は菩提樹と呼ばれるようになりま

す。お釈迦さまは雨期の三ヶ月を除き、村外れのお堂や林や岩山の洞穴に泊まり、朝になると村や街に出て鉢鉢し、捨てられた布きれを継ぎ合わせた手作りの袈裟をまとい、これ以上は考えられないという、まことに質素な暮らしを続けられました。

お話を聞きたい人がいれば、王様や大臣、財閥にとどまらず『犬殺しのマータンガ』、『遊女アンバパーリ』、『銚職のチュンダ』というような、人間扱いされない下層の人たちにも分け隔てなく、分かりやすい例え話を使って教えをお説きになりました。

悟りを開かれてから五十年、八十歳になった時、いつも身近でお世話をしているアーナング尊者に「私はクシナガル村のサーラの林で入滅を迎えるから、敷き物を調えるように。」とお命じになって、頭を北にお顔を西に向けて、静かに横たわりました。

急を聞いて駆けつけた村人、お弟子達が見守る中、最後の教えを説いてから、「聞き忘れた事があればどんな小さなことでも聞くように」と、三度お尋ねになり、誰も疑問がない事を確かめた上、「それでは弟子達よ、我が亡き後は私が説いてきた事を抛り所に励むが良い。」と言

い残して涅槃の世界に行かれました。それは二月十五日、満月が輝く夜中の事だったとお経に書かれています。

上の涅槃図はその時の様子を約束事(儀軌)に従って描いたもので、悟りを開いたお弟子達、天上の神々、在家の人たち、獣や昆虫ま



だが集まって悲しんでいます。右下に、転げ回って悲しんでいるライオンが見えます。

お釈迦さまが伝えたかった事とは、人間が生まれながらに持っている一番根っこの悩み、「世の中は自分の思い通りにならない」という『苦』を乗り越える方法のことですね。

真つ先に考えられる事は、お釈迦さまのように、持ち物や世間との係わりを捨てて、出来るだけ身軽になる事でしょう。確かに、あれも欲しいこれも欲しい、という欲を捨てれば修行はやりやすくなるでしょう。

その上で、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の『六度の行』という修行をすることです。

でも、身軽になつて出家できる人は、大勢の中の一部に過ぎません。大方の人、農家のお嫁さんや家族のある漁師さんや八百屋さんは、置いてけぼりでいいという事にはなりません。つまり出家した人は、専門に修行できる恵まれた入院患者、そうでない人は仕事をしながらの通院患者です。

普通の人には小難しい理屈など分かるはずありません。うまくは言えないのですが、理屈は分からないけれど、お釈迦さまの慈悲の心を頼りに暮らせれば、穏やかな暮らしが出来るということではないでしょうか。それから千五百年あとの弘法大師ことお大師さまも、そのお人柄に魅かれてお遍路の人が後を絶ちません。

ここで大事なのが『六度の行』の一番目、『布施』だと思えます。「してもらって嬉しい事をする」のが布施ですから、優しい眼差しも布施。お年寄りに座席を譲るのも布施ですね。個人が大事とかプライバシーが大事とかと強く言い過ぎて、人と人の間柄が寒々しくなりました。一人暮らしの人が、だれにも看取られず亡くなっていた、という悲しい話も聞きます。『布施の行』を普段から心がけていれば、多少のお節介も自然にでき、相手に喜

んでもらえる筈です。

そこで思い出すのが、近ごろ話題の『お坊さんの宅配便』です。インターネット上のスーパーストアAmazonに、「全国一律三万五千円の料金で、お坊さんが法事を引き受けます」というサービスが始まって、賛否両論賑やかになっているというのです。

菩提寺から離れ過ぎて、「泊まりがけで法事を頼むのは気が引ける」とか「料金がはつきりしているから頼みやすい」など、理由はそれぞれ尤もだと思うのですが、日本中どこに行ってもお寺があるのに、何故そこへ相談に行かないのでしょうか。而も「私が行きます」と登録するお坊さんが既に四百人もいて、企画会社の方が戸惑っているという事です。

お会いした事はないのですが、成田長寿院(曹洞宗)のご住職、篠原鏡一さんのように人情にあふれ、困った人の相談相手にとことんなっている方などごく稀で、「アポ(予約)がなければ会いません。」とか、「お布施はこれ以上をお願いしません。」など、普段から敷き居が高いと思われるお寺が多いのだそうで、これでは益々お寺と地域の間が離れてゆくのは仕方ないのではないのでしょうか。

月々の『まんだら通信』も今年で二十年、お墓の跡継ぎが心配な人のための永代供養墓『密厳塔』。成人後見人さんと提携して、身よりの無い人のお骨を受け入れたり、手作りのホームページに「ここに人生の避難港のお寺がありますよ」と、広く知らせたりと努力が続けていますが、まだまだ先は長いと思いつづらされます。仏教が日本にたどり着いて千五百年近く、「お金の足しにはならないけれど、やつぱりなくてはいけないよねえ」と、みんなが守って来たから今があるので、物があふれているから、心の方がどんどん貧しく、うそ寒くなつてゆく昨日今日、私自身、自戒を込めてもつとつと考え直さなければならぬと思うこの頃です。

につぼん人情小噺 三遊亭鳳豊  
第一二一話 聞き書き

えー、最近、商店街に行きますと、男性の高齢者の方がたくさんいらっしゃることに改めて驚きますね。昔は買物に行くお年寄りと言いますと、たいがい、おばあちゃんだったりいたしましたが、男性が長生きをするようになったんでしょうか。ひとり暮らしが増えたのか、はたまた、家にいられない事情でもおありなんですかね。

それにしても高齢化は、これからもますます進んでいくんでしょうね。そうそう、高齢化の影響は、幼稚園でもすでに表れているようですね。

先日、幼稚園にうかがいましたら、こんなことを言っていましたよ。年少さんが「いやあ、もう生きていくのに疲れたよ」なんて言っていました、それを聞いてた年中さんが笑って、「いまどきの若いやつは、どれもこれも情けねえ」なんてね。そしたら、そばにいた年長さんが言いましたよ。「そつだなあ、第一、暗いよな。俺たちの若い頃は、もっと無邪気に遊んでいたもんだ」なんて。これから先が思わす心配になりますか……。

今日は、お年寄りに一所懸命、昔話を聞いている未来の看護師さんたちの話をしましょう。

九州は福岡女学院看護大学に、酒井康江さんという先生がいます。

先生のご専門は、在宅看護だったことから、お年寄りに話をうかがって、それをその方の話し言葉で書いて、世界で一冊の本にして差し上げる「聞き書き」という方法に興味を持ち、上司の松尾和枝先生とも相談して、学生さんたちにもやってみようことになりました。

ええ、そんなんですよ。聞いて書くんで聞き書き。同じ書くのでも、その人の話したように書くのですから、作文の苦手な人でもできるわけです。でも、酒井先生の目的は、作品を作ることだけではありませんでした。お年寄りのお話をうかがうことで、学生にお年寄りにやさしい、人間味あふれる看護師さんになってほしいのです。

それにしても、見知らずの学生に、昔話といえども気さくに話してくれるお年寄りはいるだろうか

か？

酒井先生、日頃からお世話になっている施設に何度もお邪魔し、説明をして、ようやくいくつかの施設から、「はい、いつでもどうぞ」との了解を得られました。

ところが、今度は学生さんが不安になってきた。自分のおばあちゃんやおじいちゃんにすら、子供の頃の話聞いていないのに、知らない人がしゃべってくれるのかどうか。

それに、四年生ですから、国家試験の勉強もしなければいけないし、卒論も書かなければいけない。「先生、一回だけうかがえばいいんですよ」なんて、いかにもいやいや行く学生さんがいたりして。

そして、学生による聞き書きが始まりました。おばあちゃん、おじいちゃん、昔の話を一所懸命話してくれました。

「私ね、久留米の陸軍病院で看護婦をしたのね。そしたら、ある時、兵隊さんが下痢をして、ふんどしを汚したの。それで『汚いから捨てて下さい』って言われたんだけど、私トイレで洗って消毒して、干して、きれいにたたんで届けたら、兵隊さんがポロポロ泣いてね……。私の家、ものすごく貧乏だったから、そんなことができたのね」

「私は母親が早う死んでね、小学校卒業したら、もう奉公に出された。小さな身体に赤ちゃんおぶって、子守。そんな小さい時から他人の飯を食べてたよ。母親がおる子がうらやましかったな」「機雷って、知ってる？海の中に沈めた爆弾だ。それに、私が乗った輸送船が触れて船が沈没しかかった。海が渦をまいてたら、船は吸い込まれて終わりだけだ。幸い、船長の機転で、船ごと小島に乗り上げた。そこで、船から逃げ出して隠れていたら、終戦だよ。ああ、死なずに済んだ」

「私ね、若い頃、好きな人がおってね、その人、優しい人で、私を自転車の後ろに乗せて走ってくれるの。楽しかった。ああ、こんな話をしたら、その頃がよみがえってくるわ。」

え、その人？ 出征してまもなく戦死しちゃった。私にビシッと敬礼して、戦争に行ったとき、帰ってこんかった」

一人ひとりの学生さんたちが、それぞれのお年寄りの話を聞いて、まとめ、それに感想文を添えて、酒井先生に提出しました。酒井先生は、驚きました。なぜなら、学生たちが以前とガラッと変わったからです。

「できあがった冊子をお渡しすると、おばあちゃんには『懐かしい。思い出すね』と言って涙されました。今後は、この経験を活かし、患者さんの気持ちがよくわかる看護師になりたいと思います」「本を差し上げると、こんな私に頭を下げて『ありがとう。あなたに逢えて本当によかった』と言ってくれました。感動しました」

「本を手渡すと、大粒の涙をポロポロこぼされました。こんな短い間で、人の心をうつような関わりができたことに自分でも驚いています。この経験を生かして、看護師として人間的にも成長していかなければいけないと思いました」

「今回の聞き書きで、努力をすることの大切なことを学びました。いまの私たちはとても恵まれています。でも、昔の人は、何もなくても生きていける力を持っていることがわかりました。私たちは、もっと、お年寄りを尊敬しなければいけません」

（ああ、この子たちは、きつと将来、この経験を思い出してくれるだろう。そうしたら、患者さんの人生に寄り添う、いい看護師になれるかもしれないなあ……）

酒井先生は、ふと、自分の作品を読み返しました。それは、酒井さんが自分のお母さんに話を聞いた聞き書きでした。「お母さんも大変だったんだよね。でも、私たちを育ててくれてありがとう。私もお母さんのようにがんばるからね」酒井さんは、今週にでも時間をつくって、お母さんに手作りの冊子を手渡しするつもりです。

▼あつという間に1月が終わりました。朝6時の鐘つきも、歳のせいもあって時々時刻が過ぎてしまう事もある、困ったものです。それでも立春過ぎて、思いなしか夜明けが早くなり、今年も春を迎えられる楽しみが……。

▼涅槃図について。

2月号には何回か登場しましたが、東京の仏画家田治見美代子さんのご指導で「お寺の宏子さん」と、私の家内が描いたものです。今年も涅槃会の今月15日を中心に、本堂にかけて遺教経を読み、ご遺徳を偲びたいと思っています。▼『まんだら通信』の看板読み物『につぼん人情小噺』は、ご存知の通り三遊亭鳳豊さんがお書きになっています。

このMOKUは日本でも品格の高さでは、恐らく一二を争う雑誌だと思えます。まだお会いした事はないのですが、三遊亭鳳豊さんは本名を小田豊二さんと言ひ、聞き書きについては第一人者とのことです。この記事が心を打つのは、ご本人の人格の高さによるのは当然ですが、すべてがご自分が確かめた本当のお話だからだと、私は思っています。その意味では曾野綾子さんも同じように、事実の裏付けがあることだけをお書きになります。

この連載も、著作権の都合から、本来ならば転載などもってのほかなのですが、出版社とご著者の広いお心に甘えて、皆様にお届けしているという次第です。

▼今月の野草は、多分タチツボスミレ【スミレ科スミレ属】多分と書いたのは、スミレの仲間には似たものも多く、スミレの図鑑も持っていますが、みんな似ていて私には自信がないのです。見分け方など、どなたか教えて下さると有り難いと、いつも思っています。

▼『あそか基金』の管理を一切お任せしている、スリランカのアンギーお坊さま。お檀家は恐らく700軒はあると思います。お檀家の家庭事情を良く知っていること。だからどんな相談にもすぐに応えられます。私などまだまだ力足らずだと、思い知らされています。

2016.02.09 龍渉

